哲學研究　第十七號　五〇

感情の心理（リボーの學說）

野上俊夫

一

近世の心理學が獨立の科學たる形を具へるやうになつてからまだ半世紀を多く出て居ないが、此の半世紀內外に於ける新心理學の特色ともいふべきものを一言で蔽ふならば物理學的といふことが出來るかも知れぬ。之れはフェヒネル等によつて用ひられた精神物理學（Psychophysik）といふ名に於いても既に現はれて居る。外界の刺戟と之れによつて生ずる感覺との關係、殊に其の數量的方面などを主眼として、之れを出來るだけ精細なる方法によつて研究せんとし、物理學者の用ひて居るやうな精密な機械を用ひ、自然科學の用ひて居るやうな精密な方法によつて、出來る限り其の結果を數量的に表はさうといふやうに努めたのが、新心理學樹立以來の大體の趨勢であるやうに思はれ、殊に其の搖籃の地たる獨逸の心理學に於いて此の事は

著しかつたやうである。之れは大部分は恐らく新しい心理學の樹立者たりし人々が多くは物理學又は實驗生理學から研究を進めたと卽ち新心理學勃興の氣運が物理學(或は星學)或は生理學の方面からの刺戟によつたといふことも多く關係して居ると思ふ。試みに新心理學の大成者で目下尙ほ獨逸の正統心理學ともいふべきものゝ代表者なるヴントの主著『生理的心理學』に就いて之れを檢査して見ても、其の第一の卷中の少からざる部分を所謂『方法論』の爲めに費やし、種々の數式などを用ひて細かに說いて居り、次ぎに主として簡單なる精神作用、卽ち感覺の數量的方面、或は簡單なる空間的時間的觀念又は稍高等なる智識作用例へば記憶などの數量的方面に就いて、此の方法論を應用して居て、其等の部分の大體の體裁は頗る物理學若しくは實驗的生理學に似せやうと努めたともいひ得るやうに見える。或は其の全體の組織から云つても、先づあらゆる精神作用を智的若しくは觀念的方面のものと、情意的方面のものとに分け、主に之れを細かに心理的に分析して感覺及び簡單感情の二要素に分解し、有らゆる精神作用の結合を此れ等の心的要素(psychische Elemente)の結合としての說かうとする所は、頗る化學の組立てに似て居る所がある。尤も『生理的心理學』の他の半分、卽ち高等なる知的作用及び情意等を論ずる所は、一つは

其の對象の性質上にもよるが、此くの如くに物理的又は化學的といふやうな所は無くなつて居るが、一面からは此の兩半部が頗る體裁を異にして居て、一方は頗る精密に、他方はそれ程でも無いといふ事が、體裁の上から云つても、稍々調和を失して居るやうにも思はれる所がある。兩者の中間に當るやうなものが有つても良さゝうに思へる。一方にはスタンレー、ホールが云つたやうに『我等の學問を餘り多く物理學の理想に學ばしめんとして、方法論を過度に發達せしめ又はそれとよそはふ』たものであるとの批難を受けると同時に、他方にては頗る之れと距離の多い大まかな思考によつて論じて行つて居る。

(1) G. S. Hall, A Reminiscence, American Journal of Psychology, vol 28. no 2.

二

精神作用を出來るだけ精細に研究しやうとするには、必然の結果として其の研究の對象が可なり高い程度に發達したる心たるを要する。更に心理學の實驗に於ける被驗者は或る程度まで內省の習練を經たる人たるを要する。隨つて此のヴント等の心理學は主として成熟發達したる心を研究したのであつた。而して又之

密に研究するには其の方に強く注意を向ける必要がある爲めに、此の種の心理學の對象は、主に、明かに意識に表はれ、注意によりて明瞭になるべき方面の精神現象であつた。隨つてそれが知的方面のものに偏する事は蓋し止むを得なかつたのである。勿論ヴント自身は自分の立場を意志的(Voluntarismus)と名けて、在來の知的心理學に反對して居るが、其の研究の對象から云へば矢張り知的のものが主となつて居る。

注意に明かに表はれ來らざる種々の精神作用、即ち情とか意志とか本能とかいふやうな、無意識若しくは半意識の部分の多い作用の研究は、ヴントの心理學に於いて比較的に蔑にされて居る。或は之れを取扱つて居ても、たゞ其の大體の分類とか、其の經過の方式とかいふやうな、形式的若しくは模型的な取扱に止つて居て、其の實質的若しくは內容的方面に立入つてる事は殆ど無い。或はヴントの心理學で最も精密に取扱はれて居る、感覺の中でも、明瞭に意識の上に表はれて來ない感覺、例へば內臟感覺の如きものに至ると、極めて僅少の叙述をして居るに過ぎない。之れはヴントの正統を得へて居るともいふべきティッチェナーすら猛烈に攻擊して居るのである。(二) 殊に此內臟感覺が感情と極めて密接なる關係を有して居る事を併せ考へると、知的なるヴントの心理學に於いて之れが蔑にせられて居るのは頗る意味のある事

とも云へるのである。

之れと密接に關係して居ることは、ヴント等の研究は、成熟せる文明人の心に限られて居て、兒童や未開人や他の動物などの、未だ發達せざる心の研究は全く閑却されて居ることで、之れも亦此種の心理學をして知的ならしめ、意識に表はるゝ方面の少い情意的本能的方面を顧ることの少からしめた一つの原因である。

(11) E. B. Titthener, Psychology of Feeling and Attention pp. 185. ff.

三

元來心理學の對象たる精神現象は、云ふまでも無く生活現象の中の一種であつて、物理學、化學などの主に取扱ふ所の無機的の諸現象よりも、生物學や生理學で取扱ふ所の有機的又は有生的の現象に多く類似して居るべきは當然であつて、同時に又心理學は本來物理學、化學に似るよりも生理學に似るべきであつたのである。隨つてダーウィンの『種の起源』が出でゝ後十五年にして出でたるヴントの『生理學心理學』などは、今少し生物學的若しくは進化論的の考へ方が加味されて居るべきであつたとも思はれるが、此の事の無いのは、英國に起つた學問、殊に舊來の思想に大な

る革命を起した考へが、獨逸の學界に未だ充分に受け入れられなかつた爲めもあらうが、(三)今から之れを考へると頗る惜むべき事であるといはねばならぬ。尤も英國の心理學は流石に早くから進化論の影響を受けて居り、例へばスペンサーの心理學(四)の如きは、現代の最も進んだ心理學の根本思想を含有して居るのであるが、(此の事については他の機會に於いて少しく考へて見度いと思ふ)未だ心理學の大勢に影響するに至らなかつた。

然るに最近十數年來、心理學者間に、在來の新心理學の此の缺點に着目して、心理學を生物學的に、若しくは生物學的根柢の上に立つて研究しやうといふ運動が頗る盛んになつた。卽ち成熟した文明人といふやうな狹隘な範圍を脫して、更に初步的な幼稚なる心理作用を研究し、兒童、未開人、下等動物といふやうなものを廣く研究して、單に精神作用の現在のみならず、其の過去の狀態にも溯つて、其の進化發展の有樣をも明かにせんと試みるものが多くなつた。而して兒童未開人又は動物の研究には、到底在來の心理學の如く精密なる實驗によつて精密なる內省の結果を得るといふやうな譯には行かないので、客觀的に外部から其の動作を研究し、それよりして其の精神作用を想像するといふ方法をとるに至つた。而して此くの如き研究の進むに

隨ひ、心理學の研究は決して意識的方面に限らるべきものでないことが唱へられ、或は更に進んで決して所謂精神作用のみに局限さるべきものでなくして、生物の行動全體に及ぶべきものであると考へるに至り、所謂行動說 (Behaviorism) は米國及び英國などの少壯心理學者の間に唱へられ、更に進んでは意識といふ語を全然心理學から除き去らうと試みたものもある。米國のワットソン(五)、露國のベヒテレフ(六)などは其の一例である。

此の派の人々の研究は、從來の心理學が、成熟せる文明人の心といふ極めて狹い範圍に局限して、其の中について出來る丈け精密な實驗的方法によらうと努めたのに比較して、研究の範圍をなるべく廣く擴張して、從來閑却せられた方面の新材料を蒐集する事に努めるが、其の對象の性質上强ひて不可能なる精緻を求むる事無く、實驗の不可能なる所は單一なる觀察に甘んずるといふ風である。卽ち從來の心理學の物理的なるに對して此の新潮流は生物學に酷似して來つたのである。勿論生物學も決して觀察や分類に止るを甘んずるもので無く、動物學や植物學上の種々の實驗が次第に行はれるやうになつたのであつて或る意味から云へば、實驗的研究が最初にあつて、此の頃觀察的研究が多からんとする心理學は、恰かも動植物學と逆の進み

方をして居るやうにも思はるゝが、之れは此の學問の發生又は進歩の特殊の歴史上此くの如き有様を呈するに至つたものであつて、其の對象の範圍が廣まり、其の根柢が廣くなつたといふ事は大なる進歩なることは爭はれまい。

(三) E. Haeckel, Der Kampf um den Entwickelunggedanken, S. 22, S. 23.
(四) H. Spencer, Principles of Psychology, L. Hearn, Kokoro, pp 226.
(五) Watson, Behavior, an Introduction to Comparative Psychology.
(六) W. Bechterew. La psychologie objective (trad iut par N. Kostyleff)

四

今此の行動說や客觀的心理學の事は暫く之れを措き、たゞ在來心理學の範圍に屬するとして何人からも疑はれなかつた狹義の精神現象のみに就いて之れを考へて見ても、輓近の傾向が次第に意識的方面より無意識的方面に向ひ、知的方面から情意的方面に向つて研究の歩を進めんとしつゝある事は著しい現象である。二十年前頃、毎年あらはるゝ心理學的研究の内、感情に關する研究が平均二十以下であつたのに、(七)此最近數年間の研究は其の幾層倍に上つて居る。之れは心理學の研究が、物理學的より生物學的になり、發達せる心に限られたものが、幼稚なる心をも廣く研究する

に至つた當然の結果である。知的作用は、人間が他の動物に比して特に多く有して居る作用で、甚だ大切なものではあるが、之れは決して我々の心の總てゞは無い。否むしろ我々の心を公平に觀察すれば、之れとは正反對に、我々の心の大部分は他の動物乃至未開人又は兒童と共通なる本能若しくは感情によつて占められ、知的作用は心の極めて皮層的な僅少なる部分を形づくつて居るに過ぎない。隨つて其の人生に及ぼす影響も極めて微細で、人間の行動の大部分は下等又は盲目なる本能又は感情によつて起り、眞に知的作用によつて支配さるゝ行動は甚だ少い。故に人間の精神作用全體を研究すべき任務を有して居る心理學が、研究の難易の點から止むを得ざる事とはいへ、感覺的知的方面のみを格別に重くして、心の中核ともいふべき感情的方面を忽にして居るのは決して公平なる仕方とはいはれないのである。現代の生物學的心理學が、主として此の從來閑却されて居た方面の研究を高調して居る事は誠に其の當を得て居ると思ふ。

（七）T. Ribot, Psychologie des sentiment, Paeface.）

五

生物學的心理學の急先鋒の一人であり、又現今に於ける其の領袖ともいふべきは、米國のスタンレー、ホールである。氏は最初ヴントにも學んで實驗的研究をもやつたのであるが、後に至り兒童、未開人等の心的研究に沒頭して、心理學の眞の任務をこゝに認め、遂にヴントに對して叛旗を飜し、客觀的若しくは發生論的研究を標榜して、盛にヴントを攻擊して居る。一九〇四年に現はれた彼れの始めての著書『青年期』は單に青年期の研究のみでは無くして、彼れの見地全體を公にしたものとも云へる。我々の深き性質に於いては我々は無數の祖先の習慣又は行動の法則によつて影響せらるゝのであつて、此等の祖先は證人の一大團體の如くに生涯我々の傍に居る。我等の精神は反響室の如きもので、其の中で我等の祖先のさゝやきが響いて居る。此くの如くにして我々は有らゆる感情本能が吾人が祖先より享けたる心的遺傳の支持者たる事を假定し、此等のものゝ內で、或るものは我々の一生涯を通じて意識の閾の下に留まり、或るものは本能となりてあらはれ、或るものは習慣となつて現はるといふ事を假定すれば、吾人は舊き方法と別地の見地に立ち、更に廣き視界よりして研究を進めることゝなる。吾人は精神の考古學を研究し、意識の生ずる以前に生じたる古き地層とも云ふべきものを研究すべきである。之れに比すれば意識

殊に知的作用の如きは最近に生じたるものに過ぎないので、精神の或る一部分を更に十分に又更に明かには云ひ現はして居るけれども、而かも常に部分的、一面的で偶然的たることを免れぬといひ、(一〇)感情及び本能の研究の重要なることを切言し、その種々の年齢に於ける變化を研究し、更に此の研究の結果よりして教育的の取扱法に及び、從來の知的に偏したる教育を打破して、眞の人格を形成する、深い、自然的な、健全な教育をしやうと努めて居る。

ホールが兒童や未開人の如き發達の度の幼稚なる精神作用の研究から進んで、情的生活の重要を力說したに對し、主として精神の變態の研究から進んで、同樣に感情の重要なるを說くに至つた人はヴォーンのフロイドである。氏は始めヒステリーの研究よりして、過去を於いて抑壓せられたる何等かの感情が、將來鬱結してヒステリー症狀を起すものであるといふやうな考へからして、彼れの獨特の無意識(Unbewusst)前意識(Vorbewusst)及び批判(Zensur)の考へに及び、更に稍正常なるに近い精神狀態卽ち夢の研究(一一)に及び、或は日常生活に於ける諸種の變態、例へば忘却、言ひ誤り、書き誤り、失策等の研究(一二)に及び、更に滑稽、頓智(一三)を研究して遂に新なる一種の心理學を編み出すに至つたのである。之にはたゞに機能的の精神の變態の治療に用ひて或る度

まで有效であつたのみならず、純學術的の見地から見ても頗る面白い考へ方といはねばならぬ。

（八） G. S. Hall, Founders of Modern Psychology.
（九） ,, ,, Adolescence 1904.
（一〇） ,, ,, op. cit. p. 61.
（一一） S. Freud. Die Traumdeutung
（一二） ,, ,, Psycholpathoogie des Alltagslebens
（一三） ,, ,, Der Witz.

六

ホールとフロイドとが夫々兒童の研究若しくは精神的の研究から出發して精神の中に於いて感情の重要なる事を說くに至つたに對し、初めより純正の心理學的見地の上に立ち、其の見地からして夙に感情研究の必要ある事を說いたのは昨年の末に物故した佛國の新心理學の父テオデュル、アルマン、リボーである。其の大著『感情の心理』は二十年前の出版であるに係らず、今日よりして之れを見ても尙ほ新しき生命を有し、或は當時既に二十年後の今日に起るべき新研究を暗示して居るやう

な點もあつて、其の卓見實に驚くべきものがある。其の外にもリボーは尙ほ種々の方面に注意を向けたのであつたが、彼れの尤も心血を瀝いだのは矢張り感情に關することで、其後も彼れは續々此の方面に關する著書を公にした。卽ち『激情に關する論文』(一五)『感情の論理』(一六)『感情の諸問題』(一七)等であつて、晩年に至るまで此の問題に注意を怠らなかつたのである。

(一五) Essai sur les passions
(一六) Loigque des sentiments
(一七) Problemes de psychologie affective

七

リボーは先づ感情の心理に關しては根本的に異れる二つの立場ありとして居る。第一は主知說 (these intellectualiste) であつて、感情を以て二次的のもの、他より派出せられたるものとなし、或は意識の一つの相又は一つの機能なりと見做し、初めに認識があつて後に感情ありとし、或は感情は『不判明なる知』(intelligence confus) なりと考ふるものである。ヘルバルトの觀念機械說は其の代表者で、大體獨逸の心理學者は多く

之れに屬しホルウィッツ、シュナイダー等が其の僅少の例外をなすに過ぎない。第二は生理說 (thèse physiologique) で、感情を以て第一的のもの、自律的のものとなし、之れを知に歸せしむる事は不可能で、知の以外に、又知なき時にも存在し得、全く知と異れる起源を有して居るとするものである。ベイン、スペンサー、モーズレー、ジェームス、ランゲ等は卽ち之れに屬する。

彼れは此くの如くに感情の性質に關する相反すする二つの說をあげたる後、明瞭に、彼れ自身は『何等の制限なしに此の生理說に隨ふものである』と明言して居る。

リボーは感情を極めて廣義に解釋して居て、感情には喜、悲、齒痛、芳香による快感、愛、怒、恐、功名心、美的享樂、宗敎的感情等を數へて居る。而して彼れは此れ等の感情をごく皮想的に觀察しても各兩種の方面を具へて居るとした。第一は客觀的又は外部的の方面で、第二は主觀的又は內部的方面である。第一は卽ち感情の起つた時に生ずる身體的變化で、種々の運動、身振り、態度、聲の變化、赤面又は蒼白、震顫、分泌、排泄の變化等である。第二は吾人の意識內に直接に知らるゝもので、他の人に在つては間接に歸納的に知らるゝもので、卽ち快、不快、又はその混合せる氣持である。

リボーは更に進んで此外的及び內的の二方面の內、本質的なるものは云ふ迄もな

く第一の運動的方面で快不快は感情生活の皮想的なる部分に過ぎないとし、感情の眞の要素は、運動によつてあらはるゝ傾向、體慾、要求、欲望であるとして居る。卽ち在來の言ひ方では吾人の感受性(sensibilité)は快苦を生ずる作用なりと考へられて居たが、リボーは之れを以て或る物の方に向ひ又は之れを欲求する(tendre ou désirer)作用であつて、其の結果として快苦を感ずるのであるとする。併しこゝにいふ傾向(tendance)とは決して不可思議なるものでは無くして、一つの運動、又は運動の禁止の初發的の狀態に在るものである。此の傾向、欲求することが卽ち感情生活の根本であつて、快や苦の心持ちはたゞその符號又は記號なるに過ぎない。

八

リボーの立場が既に此くの如く生理的であるから、彼れが感情の本質に關する所謂ジェームス、ランゲ說に贊成して居るのは實に當然である。感情(又は情緒)の本質について舊來行はれて居た考へは次ぎの如くである。卽ち或る感情(又は情緒)の起るに當つては、第一に或る智的作用、認識作用があつて、その後に第二に之れによつて喚起されたる感情が起り、之に引續いて第三に其の結果として身體的の變化を生ず

る。例へは、己れの親の死せりといふ報知を得て(第一認識作用)之に對して悲しみの情(第二)が起り、之に次いて涙が出で、顏が蒼白になり、啜り泣きをする(第三、身體的變化)といふやうになるのである。所が米國の心理學者シェームス(一八)及び丁抹の醫學者ランゲが(一九)別々に殆と同時に發表したる說によると此の在來の考へは實際の狀態をいひ表はして居るもので無くして、實際は第二と第三とが顚倒して居るのである。卽ち始めに或る種の認識作用があると直ちに之れに引續いて身體的の變化を生じ、之れが心に影響して感情となるのである。例へば親の死の通知を受けたら、直ちに涙が出で、顏が蒼白になり、又は呼吸にも變化を生じて啜り泣きをする。其の爲めに心の中に悲みの感じが生ずる。或は此の身體的變化の感じが卽ち感情なのである。といふのが此の說の大要である。ジェームスの有名な言葉、卽ち我々は恐るゝが故に震へるのでは無い、震へるから恐るゝのである。怒るが故に打つのでない、打つから怒るのである。悲しいから泣くので無い、泣くから悲しいのだといふことは、幾分か此の考へを誇張して言ひ現はしたものである。

此の說に對しては一時批難が非常に多く起つて、心理學上の議論の一つの中心問題となり、又之れが刺戟となつて多くの研究を喚び起したのであるが、リボーは眞先

に此れを自分の講義の中に引用して(一八八九年)大に之れに贊成し、『感情の心理』に於いては、此說に關する諸種の批難に答へ、又或る點に於いてジェームス及びテングのいづれよりも一歩を進めて、此の說を更に徹底的に說いて居る。

(一八) W. James. (Mind 1884).

(一九) Lange. Les émotions (tradint par G. Dumas 1885)

九

此の說に對する批難の第一は、實際或る種の認識作用からして直ちに身體的變化を生ずる場合が有りさうにも無いといふ事である。併しながら仔細に觀察すれば此くの如き實例を多くあげる事が出來る。我々が或る詩を讀み又は歌をきく時に、突然に涙が落ちて我等自らで驚くやうな事がある。或は血を見て直ちに失神するやうな人がある。悲みや驚きは其の後に起るものである。此の事は予自身の經驗に徵しても正當であるやうに思はれる。例へば調子の高い聲の歌などを聞く時、殊に小兒の歌などを聞く時に、突然涙ぐまれる事は屢予の經驗した所である。而して之れは其の歌の內容などから來るのでなく全く其の高い調子から來るやうで、且つ

何等感情の起る餘裕の無い時に突然に、涙が出るのである。此等の事から考へると、此の第一の批難は當つて居るとは考へられぬやうに思ふ。

第二の批難は、若しも身體的變化があつて後に感情が起るものならば、若し故意に或る特殊の感情の表出をするならば、其の感情自身が起つて來なければならぬ筈であるが、實際は左樣には見えぬ。如何に巧みに泣く眞似をしても、眞に悲んで泣くのとは如何にするも差があるを免れないではないかといふのである。然るにリボーの考によれば、多くの場合に於いては此の標準は應用され得ない。何となれば感情の際に起る所の身體的現象の大部分は、意志の作用によつて喚起することの出來ないものである。故に故意に感情の表出をして感情自身が起るか否かを檢しやうとする實驗は、如何にしても完全に遂行する事は出來ない譯である。然るに、此の實驗の可能なる範圍に於いては、其の結果はジェームス、ランゲ説に反對せずして、むしろ之れを支へるやうに見える。試みに長時間憂鬱の態度を執つて居れば、實際に悲みの情が起つて來る。又悲しい時に强ひて快活の態度を執り、樂める仲間と伍して遊べば、次第に悲みは薄らいで行く。或る人は、多くの俳優巧みに感情を表はしても、內心には之れを感ずることが無いといふ事實によつて、此の説に反對して居る。ジェ

ームスは米國に於いて此の事に關して多くの俳優に質問を發して、其の結果を報告して居るが、結果は個人によつて差がある。或るものは劇を演ずる時に其の腦を以て演じ、或るものは心を以て演ずる。或るものはその演ずる役目の感情を感ずるが、他のものに之れを感じない。ジェームスは催眠狀態に於ける或る人に起る現象を擧ぐれば尙ほよかつたと思はれる。卽ち此等の人の手足に祈禱、憤怒、强迫、愛情等の時に起る態度をとらしむれば(卽ち筋肉感覺によつて暗示を與へるのである)之に相當する感情は喚び起される。

第三の批難は、若し身體的表出が感情を生ぜしむるものならば、表出の强い程感情も强かるべきである。然るに實際は之れと反對で、感情を表はせば、感情は增さずに却つて消失する。悲しい時に涙を多く流せば悲みは減ずる。反對に悲みを堪へて涙を出さずに居をと、益悲しくなるではないかといふのである。然るに此の說は、表出のある間の狀態と、その後の狀態とを混用して居る。表出のある間は無論感情もある。そして表出の强い時に無論感情も强い。されど感情の種々生じた爲めに神經中樞が疲勞すれば、自然に心は沈まる。感情を抑へて外にあらはされなければ、その感情は矢張り弱いので、たゞそれが比較的に長い間續くといふに過ぎぬ。故に感

情の起つて居る間の狀態を觀察すれば、表出の强い所は感情も强く、表出の弱い時は感情も弱いといふべきである。

十

此くの如くにしてリボーは、ジェームス、ランゲ説に對しては、大に贊成の意を表して居るが、彼れは此等二氏に比すれば更に一歩を進めて、此の説を徹底的に推し進めて居る。ランゲは此説を數個の簡單なる感情のみについて述べ、その他の感情に就いては如何であるかを述べて居らぬ。ジェームスも亦主として粗大なる(coarse)感情についてのみ述べて居て、精緻なる(subtler)感情については殆ど述べまい。たゞ美的感情について少しく觸れて居るに過ぎない。それで此説の反對者は此の點を攻擊して、若しも此の説がたゞ劣等なる感情のみに行はれ、高等なるものには行はれないとするならば、竟畢その説の不完全を證據立てるものであると考へて居る。

然るにリボーは更に一歩をすゝめて、此の説は有らゆる感情に應用さるゝものであるとし、如何なる複雜なる感情も、精緻なる感情も、外觀にては身體的變化と無關係なるが如くに見ゆるものでも、皆悉く身體的變化によつて起るものであると説いた。

卽ち彼れは高等なる感情、卽ち人にのみ特有なる如き感情は結局、宗教的、道德的、美的及び知的の四群になるとし、此等の各の感情を檢査して、いづれも此のジェームス、ランゲ說の眞なる事を證明せんと試みた。

第一に宗教的感情は、他のいづれのものに比してもより多く生理的條件と關係がある。蓋し此の情は、其の信仰の如何なる種類なるに係らず、自己保存の本能と密接に關係して居るのである。實際人の眞に宗教的の感情を生ずる時には、その文明の程度如何に係らず、又その宗旨の何たるに係らず、身體の震顫を生じ蒼白となり宗教的恐怖を感じ、思はず神の前に跪伏ずる態度をとる。神秘主義者がその宗教的經驗を記載せるものに見ても、其の精神內部に起る微動が極めて猛烈にして、恰かも男女の戀愛に似て居るやうに述べて居るのが多い。又宗教心を喚起し又は之を强めんが爲めに行はるゝ儀式などでも、希臘の酒神崇拜者の酒より始めて、現代の救世軍の喧噪なる音樂に至るまで、いづれも吾人身體の各器官に直接に生理的影響を與ふる如きものならざるは無い。又有らゆる宗教に見らるゝ奇蹟、信仰によりて病の癒ゆる事などは、卽ち直接に吾人の身體に作用するものである。宗教的感情を以て生理作用とは無關係にそれ自身獨立に存在する心的本體であると解するほど誤れる事

は無い。若し之れより生理作用を除き去れば、たゞ冷き無色なる觀念が殘るに過ぎない。勿論此等の生理作用は、次第に和らげられ、又繰返さるゝ事によつて、次第に薄められて行く事は事實である。されど亦之れと伴うて宗教的感情は弱まつて行く高尚なる宗教的思想(*conception religieuse*)と深き宗教的感情とは全く相異れる二つの心的現象である。

第二の道德感情も亦之れを道德觀念と混雜してはならぬ。抽象的なる正義、義務、無上命令等の觀念は、道德的感情とは別である。眞に道德的感情を吾人が感ずる時は、吾人の身體は激動を受け、內部的又は外部的の運動を生ずる。眞に他人に對して同情を感じ、他の幸不幸を己れのものゝ如くに感ずる時は、吾人の身體に明かなる生理的變化が生ずる。こゝに盜賊又は殺人者が吾人の眼前を走つて居れば、たとひ自分がその被害者でなくとも、走せて之れを捕へんとするが如きは、卽ち吾人が生理的に激動を受けたのでは無いか。母の愛が母の心に勃發し、己れの身を忘れて子の危難を救ふといふ如き場合には、吾人の頭より足尖に至るまで一つの激動を感ずるのである。

第三の知的感情は比較的に稀れで、又通常和げられて居る。併しながら、此れが眞

に強力なる感情の性質を具へてあらはるゝ時には矢張り生理的變化は強く起る。勿論大多數の人には純粹なる眞理の探究又は發見によつて強く感情を動かす事は無いが、或る種の人にとつては必しもさうでない。學者の傳記にはその實例に乏しからぬ。パスカルが絶へず身體の苦惱を受けたる、マルブランシがデカルトを讀んで感動の餘り心悸亢進を生じて窒息せる、ハムフリー、デヴィーがポッタシウムを發見した時實驗場の中で踊りまはつた事、ハミルトンが其の數學上の方法を發見した時に、丁度電流の通じた如くに感じた事など、皆その一例である。或は此くの如き高尚なる事例を求めずとも、日常生活にも此種の例は多い。好奇心の本能は有らゆる知的感情の根本である。好奇心の滿足せられなかつた時は實際に身體的の苦痛を感ずる事は、少しく注意して他人を觀察すれば知らるゝ事である。

第四美的感情は尤も平靜で、身體とは殆ど何等の關係なきやうに思はれる。されども之れは美的感情の最も高尚なるものゝのみに就いて考へた結果此くの如く思はるゝのであつて、眞の美的感情、その發達の幼稚なものは決してさうで無い。此事についてはジェームスも頗る巧に說いて居る。初步の美的感情を生ずるには決して著しく文化の度の進步せる事を要しない。例へば原始人が其の仲間と共に歌舞

して、その音その運動に醉ふこと、又は餘り進歩しない人が、下等な芝居を見て全く心を奪はれ居ること、又は西班牙の農夫が、ロココ式に裝飾された不恰好な寺院や、奇妙なる服裝をした神像を眺めて感心することやは、皆いづれも美的感情であるが、いづれも其の身體に激動を與へ、人をして笑はしめ泣かしめ叫ばしめ、身振を生ぜしむるものである。

フェヒネルの美學(Vorschule der Aesthetik)によりて始められ、爾來獨逸の學者によりて繼承されて居る研究に就いて見るも、美的快感又は不快感に生理的要素の關係あることを知る事が出來る。卽ち美的感情には二要素がある。一は直接なる要素で感覺及び知覺に結合し、他は間接にして表現(心像及び觀念併合)に結合して居る。藝術の種類によつて此の二要素の一方が强く他方が弱くあらはれる。音樂及び造形美術に於ては直接要素が著しく、詩に於いては間接要素が著しくあらはれる。直接要素は其の定義の示す如く眞に身體に影響するものである。例へば色彩はたゞ單なる感覺にあらずして、各特有なる情調を伴ふ。ヴントに隨へば白は快活の情を生ぜしめ、錄は靜穩なる快感を生じ赤は勢力を感ぜしむる。勿識此の一々の性質については異論もあらう。又個人によつて差もあらう。併しその根本の事實、卽ち色彩

の喚起する感情が身體的變化を喚起するといふ事は疑ふ事は出來ない。フェレも同樣に色彩中に人を興奮せしむるのと沈靜せしむるものとあるといふ實驗の結果を報告して居る。音も亦同樣で、その調子の高低によつて夫れ〴〵特有の變化を生ずる。更に簡單なる感覺より進んで知覺に及べば、矢張り同樣である。色彩の配合、對比、線の輪廓及び形、對稱及び規則的なる形によつて生ずる快感、律動、拍子、調和、不調和等皆同樣である。

藝術の中で最も感情を動かすものは云ふ迄も無く音樂である。然るに同時に音樂は他の藝術に比して身體的變化を生ずることが最も多い。第一に音樂は多くの動物を感動せしむる。犬、猫、馬、蜥蜴、蛇、蜘蛛、及び多くの鳥類の音樂に感ずる事は最もよく知られて居る。十九世紀の初に巴里の植物園で象に就いて行はれた實驗は有名なものである。卽ち音又は運動の感覺が直接に身體に影響し、間接に生活作用に影響して快苦の生理的狀態を生じ、殊に高等に發育せる象の如き動物に於いて吾人の感情に近き狀態を生ずるのであらう。卽ち音樂は恰かも寒、溫又は接觸の如くに直接に身體を動かすのである。音樂の心理學の專門家も亦之れと同じ意見を有して居る。例へばドーリアクは、音樂は美的判斷などゝいふものとは無關係に快又は

苦の結果を身體に與へるといひ。ストゥムプは音樂の生ずる變化の根本は純生理的であるといつて居る。更に未開民族に就いて觀察すれば、動物に比して稍複雜ではあるが、大體は矢張り同じ事である。その用ふる簡單なる躁々しい樂器は、神經系統を激動せしめる。アメリカの土着人は極めて簡單なる面白くもない音樂を引續き四時間もやつて喜んで居る。種々の民族で魔術師などは、大鼓を用ひて自己をエクスターゼの狀態に導く。更に文明人に就いて觀察しても、其の音樂は次第に精巧複雜にはなつて行くが、其の結果の生理的たる事は疑ふべくも無い。音樂は筋肉系統に作用し、血行呼吸及び之に屬せるものに影響する。强き音は全身に激動を與へ、鋭き音は筋肉の收縮を起す。或る音樂家は、餘り强き不調和音をきくと痙攣を起すものがある。此の他音樂を聞いて、背部などにゾッとする感じを生じ、突然に發汗し、上腹部の收縮を感ずるなどはよく知られて居る事である。

此くの如くにしてリボーはジェームス、ランゲ說を更に一步を進めて有らゆる感情に適用せらるゝものであることを說き、以てその說明が部分的なりとする難者に答へたのであるが、彼れは更に此の說に幾分の修正を施して之をして益完全ならしめんと努めた。ジェームスもランゲも共に、無意識的にか或は意識的にか、感情に關

して二元的見解を取つて居る。此の點は彼れ等の反對者と同じ事である。たゞ彼等と反對者との差は、感情と身體的表出とのいづれを原因としいづれを結果とするにあつたのみである。即ち舊來の考へでは感情を原因として身體的變化をその結果なりとし、ジェームス等はその逆が眞なりとする。然れどもリボーの考へでは、此の兩者間の因果關係などを全く除去し、心身の二元的の考へ方を去つて、兩者の一元的の考へにした方がよい。むしろアリストテレスの素材と形式との比較が之れに適當である。即ち生理的變化は素材に當り、精神的方面は形式に當る。兩者は同一のものでたゞ抽象によつて分ち得るに過ぎない。古の心理學は所謂『心身の關係』を研究するのが傳習のやうになつて居たが、今日の心理學には此問題は無い。實際此の問題が形而上學的の形をとるならば、それは既に心理學の問題でなく、實驗的の形をとるならば此の兩者を別々に說くことは出來ない。如何なる精神作用も身體を離れて存在しない。即ち或る外部からの刺戟によつて、顏面及び身體の變化を生じ、血行、循環、分泌、運動等の作用を生ずると、それが精神的には感情となつてあらはれるのである。

此の如くにリボーが此のジェームス、ランゲ說を修正して更に一層徹底せしめた

る事は、彼れの心理學に及ぼした大效績の一つであつて、予自身も亦此の形に於けるジェームス、ランゲ説に全然贊同するものである。勿論なほ此の説には依然として反對者が多く、就中シェリントンの有名なる犬の手術による實驗[二〇]の如きは其の最たるものであるが、之れは故元良教授[二一]も云はるゝ如くに、實驗そのものは事實であらうが、それは決して此の説を破するに足らざるものである。

(二〇) Sherrington, The Integrative Action of the Nevous System pp 259 ff.

(二一) 元良勇次郎　心理學概論　四八五——四九六頁

十一

此くの如きリボー教授の立場より考へつれば、感情に伴ふ身體的變化の研究が、氏に於いて頗る精細なるは寧ろ當然とも云へやうが併し其の『感情の心理』の、始めてあらはれた時代卽ち今より二十年前の頃に、既に、今日漸く醫學者生理學者等の組織的研究を始めた事を豫想して居るやうに見えるのは驚嘆に値する。彼れはかゝる身體的現象を內外の二つの條件に分け、內部條件とは腦髓、心臟、その他の諸內臟に起る作用を指し、外部條件とは外面にあらはるゝ筋肉の作用卽ち顏附きや身振りを

指して居る。此の内て、外部條件卽ち顏附や身振りの研究は可なり古くからあり、ダーウヰンの研究などは今日と雖も頗る貴重なものであるが、内部條件の研究は頗る新しく起つた事で、而かもそれは比較的に外部から知れ易い所の諸現象卽ち呼吸や血行の狀態、就中脈搏、血量の變化等に限られて居た。ヴントの實驗場などでなされた此の方面の研究などは此等の範圍を出でなかつた。然るに軈近になつてから、精神現象に興味を有する生理學者や醫學者が、外科的手術の助けによつて更に内部的なる變化を研究せんとするものが多くあづた。有名なパヴロフの犬に關する實驗、又はキャノン(二二)及びクライン(二三)諸氏の研究などは、卽ち感情によつて起されたる消化器内の分泌の變化、血の成分の變化等を研究したものである。然るにリボーは二十年前既に此の方面に注目して居る。卽ち感情は身體の化學的作用をも影響するものであるとし、之れを内外二方面に分けて述べて居る。第一に外部より來る藥品は種々の感情を生ぜしむる。卽ち酒は人の心を興奮せしめ愉快ならしめ、或る種の藥劑は人を沈靜せしむる如きである。更に内部的に感情の爲めに血液の成分その他に化學的變化を生ずる事がある。例へば憤怒、恐怖、疲勞等に於いては血の性質が平生とは異なり、又唾腺、乳腺の分泌物にも變化を生ずる。汗も亦感情によつて、その臭氣

を變ずるは勿論、時としては其の色を異にし、赤、黄、綠、青等の色を帶ぶることがある。尿又は生殖腺の分泌物にも同樣の作用が起るのである。

勿論リボーはたゞ上の如き事を暗示して居るだけで、一々の場合に如何なる變化が起るか、又その變化の本質は如何なる化學的物質によつて惹記さるゝか等の事は論じて居らぬ。これ二十年前に專門の醫學者で無かつた彼れにとつては當然の事である。併しその時既に此くの如き事に注目し、例へば今日のキャノン等の激情の際に血中にアドレニンの分泌すること又は砂糖の遊離すること等を立證したやうな實驗を豫言して居る如くに見えるは、亦以て彼れの卓見を知ることが出來る。

(二二) Cannon, Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear. Rage, 1915

(二三) Crile, The Origin and Nature of the Emotions.1915

十二

リボーは更に感情生活が全精神生活の中に於ける位置を考へ、その最も重要の地位を占めて居ることを生理的及び心理的兩面の證據によつて明かにした。第一に生理的方面から見れば、あらゆる生物に於いて植物的生活は常に動物的生活の以前

に現はれて居る。甲は卽ち體慾となつてあらはれ、乙は感覺となつてあらはれる。卽ち體慾又は感情、本能は感覺若しくは知的作用の生ずる以前に於いて既にあらはれて來るもので、隨つて最も根本的なるものである。動物の動作を觀察しても動物は體慾若しくは欲求の集合で、其の心の全體はたゞ食物を見出し、敵を防禦し、己れの種族を繁殖せしめんとの念によつて支配されて居る。人の幼兒も同樣である。次ぎにその心理的證明は前に既にショーペンハウエルがやつて居ると云つて、その言葉を假りて居る。卽ちショーペンハウエルは自己意識中に於ける意志の最有力なることを說いて居るが、元來此の人の所謂意志は極めて廣義で、欲求し、願望し、逃れ望み、恐れ、憂し、憎む等卽ち吾人に快苦を與ふるもの全體を指して居る。此の如き意味に於ける意志は第一に普遍的である。卽有らゆる動物は一つの例外もなく皆自己保存と繁殖とに努力して居る。知が各個人によつて相異るの比では無い。第二に意志は根本的である。卽それは知よりも以前にあり、知と獨立して存在して居る。むしろ知は情を基として成つて居るとも云へる。隨て情の根抵は深く、知の根抵は淺い。知による友情は稍もすると破れるが、心情による友情は强めて强い。第三に意志の力は極めて强い。人生を動かすものは情の力で知は情に用ひられてその目

的を示す位に過ぎぬ。

此くの如く感情の人生生活に於いて有力大切なる事は明々白々であるに、今迄の人が動もすれば之れを輕んじ、或は之を感覺の一つの性質とし、或は不明瞭なる知として居たのは殆ど解し難い事である。是れ恐らくは感情を心理的に取扱はずに哲學的に取扱つた結果であらう。而して哲學は必然的に知的である。隨つてその成熟せる形のものゝみを見て、それが下等なものから發展して來る有樣を見ない。隨つて人の心の知的方面のみが明に知られて情的方面は閑却せられたのであらう。

十三

此くの如くにしてリボーは感情の本質が身體的變化と密關せることを明かにし、その人生に於いて重要なる事を極說して、更に進んで一つ〳〵の感情について精細なる研究をして居る。彼れが其の次ぎ〳〵に著した書物には更に感情に關する種々の方面に觸れた問題を取扱ひ、其の範圍の廣汎にして、取扱ひ方の周到なることは驚くべきものがある。然れども感情の問題は更に〳〵廣汎にして、更に〳〵に周到なる研究を要する。リボーによつて從來の心學學の知的研究に偏した居た者が、感

情研究の大切なる事を悟らしめられたとすれば、今後の學者は更にリボーの遺志をついで此の精神の中核の問題の研究に尙ほ一歩を進めるとに努力すべきであらう。

リボーはその『感情の心理』の最後にスピノザの言を引用して、彼れの書物全體の精神を要約せるものなりとし、之れを以て其の書の結語として居る。予も亦之れを抄譯して、此の不完全なるリボーの學說の紹介の結びとしやう。曰く『體慾は人間の本質それ自身である。之よりして必然に人間の保存に役立つ有らゆる變化が生じて來る。體慾と欲望との間には何等の差が無い。强ひていへば欲望とは自身の意識を有せる體慾たるの差あるのみである。隨つて人が或るものに對して欲望を生ずるは、其の物が良いものだと判斷した爲めでは無い。反對に體慾及び欲望が其の物の方に人を惹附けるが故に、其の物が良いと思はれるのである。』